

特集
大分
豊の国 地域社会の未来像

Special Features
OITA
Local Communities in Future in the Country of Affluence

温泉

ONSEN

温泉ルネッサンス 新たな楽しみ方の提案

斉藤雅樹

SAITO Masaki

べっほはっとうおんせんどう
別府八湯温泉道発案者/
大分県産業科学技術センター/主任研究員



1—別府の温泉とは

別府は日本一の温泉地である。別府在住の私が書く手前味噌のようだが、事実である。図1に示すとおり、源泉数日本一(2848孔)、湧出量日本一(約9万リットル/分)、泉質数日本一(11種中10種)で、この数字は世界でも湧出量が二位になる以外は第一位である。おそらく地球上でもっとも温泉に恵まれたエリアと言って良い。大分は2002年サッカー日韓W杯の開催地地域の一つだったが、観光宣伝のためその前のフランスW杯に別府の湯煙のポスターを貼ったところ、数百本ほど立ち上る白い柱を指して「これは何だ?」と質問が集中、「スチームだ」「そんな危険なところに人が住んでいるのか?」

と仰天されたという。世界でも希少な「地熱と人が近い街」と言える。

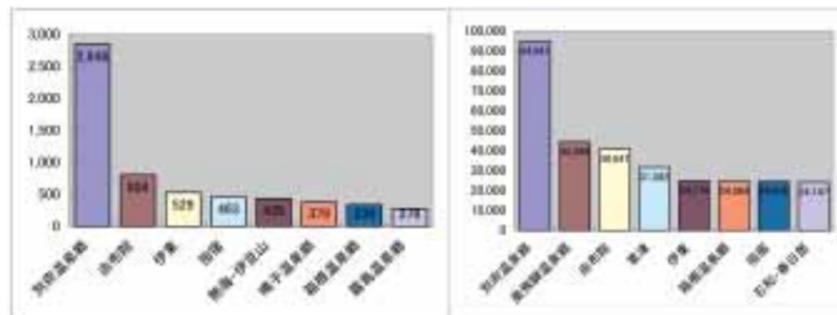
それほど別府の温泉の質・量は豊富である、と言いたいのであるが、一方この事実は案外と知られていない。テレビのクイズ番組で「日本一湯量豊富な温泉は?」という四択出題に「別府」と正解したのは三割ほど。四択ならあてずっぽうでも二割五分ゆえ、ほとんど有意な数字ではない。他地方ならまだしも、別府にこれだけの温泉があることに、地元でも気付いていない人は多い。

反対に、別府の実力を正しく評価している人もいる。いわゆる「温泉通」である。全国の温泉を三千も四千も体験した彼らは、別府を「温泉の聖地」と評価する。中には入籍の際に本籍地を別府にしたカップルもいるほどだ。一般人の想像を超えて、マニアの別府に対する思いは、湯以上に熱い。

2—高評価の理由～湯そのものを愉しむ～

なぜ、別府は彼らにここまで支持されるのか。先述した圧倒的「量」がある。それに加えて、別府には想像を超える湯のバリエーションがあるからである。ほんの一例を挙げると、珍しい青色の湯(写真1)もあれば、硫黄の濃い白濁の湯(写真2)もある。

温泉は「硫黄泉」「食塩泉」など、泉質で11種類に分類さ



日本の温泉地の源泉総数ベスト8(孔数)
(日本温泉協会「温泉」1997年8月号をもとに作成)

日本の温泉地の湧出量ベスト8(リットル/分)
(日本温泉協会「温泉」1997年8月号をもとに作成)

■図1—国内の温泉地における源泉数と湧出量



■写真1—青色の湯(神和苑)



■写真2—白濁の湯(別府温泉保養ランド)

れる。そのうち10種類があると書いたが、実は同じ泉質でも湯の個性は微妙に違う。例えば「硫黄泉」には透明もあれば白濁も青白い湯もある。酸性もあればアルカリ性の硫黄泉もある。濃いのも薄いのもある。よって、泉質は厳密に言えば源泉の数だけあると言える。つまり別府には2848種類のお湯があるわけである。

温泉の楽しみ方は人それぞれである。大きな浴槽にゆったりと五体を伸ばす醍醐味がたまらないという人、小ぶりのヒノキ風呂や一枚岩くり貫きの岩風呂がいいという人、溪流のせせらぎを聞きながらの露天入浴こそ最高という人。しかし、これらはいずれも温泉のアレンジを楽しんでいると言える。湯そのものではなく、その周囲、湯の活かし方を楽しんでいるということである。たとえて言えば、レストランで味そのものを楽しむことより、お皿やテーブルやBGMにこだわっていることになる。グルメと言われる人たちは、それらの要素にも無頓着ではないだろうが、一番の関心は言わずと知れた「味」そのものにある。これは温泉で言えば「湯」そのものに当たるわけである。従って、温泉通、温泉マニアと言われる人は露天の有る無しや浴槽の材質うぬぬよりもまず「湯」そのものの個性に注目する。湯の良し悪しがあつて、その次に湯のしつらえ、即ち周囲のアレンジに目が行くのである。

こうした、湯の個性にこだわる人たちにとって、別府は特別な存在である。何せ、個性が2848通りもあるのだ。一口に2848湯というが、これは毎日違う温泉に入り続けても7年以上かかる数字である。しかも、ありふれた湯もあるが、飛びぬけて個性的な湯も数多く存在する。これが温泉好きの心を打たないはずがない。従って、温泉好きになればなるほど、温泉に詳しくなればなるほど、別府を好きになってしまうという法則が成り立つのである。

3—数を入れて湯の良さを知る

専門家が惚れ込む「湯の良さ」をいかに表現して普及するか。その目的でスタートしたのが「別府八湯温泉道」である。平たくいえば、88湯をめぐる温泉スタンプラリーである。

概して言えば、数をたくさん入れれば湯は分かる。おのずと湯の個性がそれぞれ異なることに気付く。マニアの第一歩である。ワインでもクルマでも通になるには個性の違いを知ることから始まる。逆に、入った湯が少なければ楽しみ方の幅は当然限定される。

ところが、これだけ多くの種類の温泉に恵まれている別府の市民は、案外と色々な湯に入らない場合が多い。いつも行く「My温泉」以外は知らないことが多いのである。

自分の湯はよく知っていても、隣の湯を知らない人は多い。旅館どうしても事情は同じである。むしろ敵情視察ととられかねないので、経営者は素人よりも温泉を訪ねにくいようだ。

こういう人に「オススメの温泉は?」と観光客が聞けば、いつも「〇〇の湯」という固定された回答になってしまう。別府のようなバリエーション豊富な温泉地では、コンセプトが単一の温泉地に比べて観光客のニーズに合わせるのが案外難しい。「別府」に期待して来るものが様々なので、下手にオススメをすると期待はずれになってしまう。湯治情緒を求める人に最新の眺望ホテルを薦めたり、静かな溪流の家族湯を求めるカップルに大衆的な泥湯を薦めていてはミスマッチである。一方、それぞれの分野で高いレベルを誇る別府では、的確なオススメを答えられれば満足度は非常に高くなるはずである。

世界一の選択肢を与えられながら、いつも同じ温泉に入っているのは、巨大遊園地に来ていて片隅のガチャポンでしか遊ばない子供のようなものである。別にそうした楽しみ方を否定するものではないが、仮に来園者のほとんどがそうだとしたら、遊園地経営者は何らかの対策が必要だと考えるであろう。客にオススメの遊具を聞かれてガチャポンとしか答えられないガイドには、やはり変革を促したくなるはずである。

4—「別府八湯温泉道」とは

温泉にまずはたくさん入ってください、規模を、バリエーションを体感してください、という企画が「別府八湯温泉道」である。

別府にはお金さえ出せば入れる温泉が約400湯ある。このうち、88箇所(現在は対象を134湯に拡大)にスタンプを設置し、台紙「スパポート」に入湯印を集めてもらう仕組みである(写真3)。入湯スタンプを8つ集めれば初



■写真3—スタンプラリーの台紙「スパポート」(右)、バイブル的な「別府八湯温泉本」(左)



■写真4—温泉道タオル。入湯数(段位)により色が違う

段、16で二段、24で三段と昇段していき、80で十段、88箇所の入湯を済ませれば「温泉道名人」になれる。それぞれ「段位認定証」と、その段特有の色をついたタオルが発行される。初～二段：白、三～四段：緑、五～六段：赤、七～十段：紺と徐々に“尊い”色になっていき、名人は黒地に金文字刺繍、いわゆる「黒帯」タオルになる(写真4)。

別府八湯温泉道には「スパポート」のかわりに携帯電話のインターネット機能(iモード、EZweb、Vodafone live!)を使っても参加できる。番台さんにその温泉固有の「今日の合言葉」を覚えてもらい自分のケータイに入力すると、アラ不思議!入湯スタンプが表示される(写真5)。肌身はなさぬケータイがスタンプ帳になる画期的なもので、開発した大分県産業科学技術センターでは特許を出願している。ひなびた共同温泉と、最新のIT技術のミスマッチも良いものである。余談だがこのシステムは他の分野にも広がり、産婦人科医院の団体が運営する電子母親学級システムに導入されている。

スタンプラリーと言えば大体、スタンプ数個かせいぜい10か20も押せば完遂できるのが相場である。88箇所のスタンプラリーは壮大である。実は、そんなにたくさんスタンプを押すの!と驚いて欲しいのである。これは



■写真5—「ケータイ温泉道@別府」のトップページ(左)。合言葉を入れるとスタンプが表示される(右)

即ち、別府にはこんなに温泉があるの?という驚きでもある。ある実行委員が名誉名人を授与すべく平松守彦・前大分県知事を訪れ、最後のスタンプを押してもらったところ、「別府に88湯も温泉があったのか!」と言われたそうで目論見どおりである(もっとも知事に言われるとは思っていなかったが…)。

5—別府広報の立役者「温泉道名人」たち

この企画は2001年春に開始され、現在までの4年間で約700名が名人になっている。大観光地にして700という数字は少ないのでは?と思う向きもあるだろう。しかし、88湯を完遂する労苦(?)を考えて欲しい。毎日異なる温泉を巡って約3ヶ月を要する。単なる観光地めぐりと違い、温泉入湯が義務付けられているので予想以上に大変だ。私も体験者であるからよく分かる。楽しくはあっても途中で投げ出そうと何度も考えるほどの数量である。

その労苦を乗り越え、名人になった喜びはひとしおである。かつ、読書百遍ではないが、88湯もの違う温泉に入ると、それだけでかなりの「温泉通」になってしまう。湯の個性、湯の違いがなんとなく理解できるようになるのである。そして、何より別府の湯が大好きになってしまう。大好きになると、語らずにいらなくなる。ユーザーの「語り」は重要である。インターネットが普及した昨今、人気ホームページやブログの記述の方がヘタなガイドブックより宣伝効果がある。試みにGoogleで「別府八湯温泉道」を検索すると、969件がヒットする。修行サイトや名人の掲示板もたくさん出来ている。温泉道の完遂者である「名人」たちは、図らずも広報宣伝隊となって今日も全国各地で別府の湯の魅力を語ってくれている。

6—湯めぐりの大義名分「温泉道」

実は「別府八湯温泉道」にはモデルがある。四国霊場八十八箇所めぐりである。早い話が千年続くスタンプラリーである。四国では立派な産業になっている。八十八寺を巡る壮大さ、インパクト、まさに企画の勝利だと思う。別府の温泉道も千年続いて欲しいものである。

四国巡礼を手本にしたのは、八十八という大きな数字によって四国が霊場であることを一瞬で理解させる手法もそうであるが、同時に八十八箇所を設定することで寺めぐりの大義名分になっているところに感心したからである。もし、巡礼対象が指定されていなければ、それほど多くの寺に行ってみようと思わない人がほとんどであろう。

同じように、温泉めぐりの道筋をつけ、大義名分を与えているのが別府の「温泉道」であると言える。これが

無ければこんなに別府の湯に入らなかった、という人は多い。特に地元の人に多い。温泉道の対象となっている施設は、旅館・ホテルも多いが半数以上は地元密着の共同温泉である。実は別府の共同温泉の数は、外来客OKのタイプが約100湯(写真6、7)、外来客を断る地元専用タイプはそれ以上あると言われ、この数字も世界一であることは疑いない。

観光客が多く訪れる共同温泉は別として、生活者のための共同温泉は数年前まで外来者にとってさほど居心地の良い場所ではなく、むしろ敷居が高い場所であった。私も何度か経験があるが、ヨソ者への警戒心があらわであったり、中には「こんなところに来んでも〇〇温泉があるよ」と暗に排除されたりした。つまり、温泉などどこに入っても一緒、ならば観光客は観光客用の風呂に入りなさい、という話である。しかし、温泉好きにとってはこの論理は当てはまらない。なぜなら、その湯は、その共同温泉でしか入れない唯一無二の湯であるから。

その温泉固有のスタンプを押す、という行為は、この理解されにくい目的に立派に大義名分を与えてくれるのである。「ここの湯に入りたからここじゃなきゃダメなんです」と言っても番台さんに変な顔をされるが、「ここのスタンプが欲しいから」というと「ああ、そうかえ」と納得される。そして、入湯者自身も敷居の高い地元系共同温泉を前に「どうしてここに入らねばならないのか」と自問したときに、温泉好きなら「ここの湯を知りたいから」でクリアできる敷居を、「ここのスタンプが欲しいから」という大義名分でクリアできるのである。そして、ひとたび敷居をまたげば素晴らしい湯との出会いが待っている。こうして、一湯一湯スタンプを集めるうち、スタンプとの出会いではなく、湯そのものに出会いたくて温泉をめぐるようになる。マニアでなかった普通の人があつた温泉好き、温泉通に変貌していくのである。



■写真6—共同温泉「洪の湯」。市内には百湯以上の共同温泉がある



■写真7—タイムトリップしたかのような共同温泉「市の原温泉」

7—地元市民の変化

共同温泉の側でも4年前の開始時、スタンプ収集者は話題になったようだ。ある温泉道の「行者」が共同温泉に行った。「あのう、スタンプを…」と言うと受付の母娘は「あっはっはっは」と大爆笑。戸惑っていると「クルマ降りるときから噂してたんですよ、絶対「スタンプさん」だって」。どうやら「スタンプさん」は共通してソワソワしており、湯に出会いたいという情熱は当初、奇異に映ったらしい。

共同温泉では、温泉道の効果で新規の入湯客が増えたという声も聞く。これまで入湯料割引デー「風呂の日(毎月26日)」や、無料入湯券などの企画では割安感の強い大規模施設に入湯客が集中していた。しかし、ことスタンプラリーでは大施設も小さな共同温泉も同じ1カウントである。よって、温泉道では入湯客はどの施設にも均等に誘導されるのである。従って、日頃の入湯客数が少ない小施設ほど、温泉道の効果は大きい計算になる。

今では各地の共同温泉のホスピタリティは劇的に向上し、温かい対応に心とむことも多い。温泉めぐり、湯の個性を知るという愉しみが確実に存在する、ということも理解されてきた。番台で爆笑されることもないようだ。

温泉を経営する側、管理する側も徐々に温泉道の意味するところを理解しはじめ、自ら参加し名人になった方もいる。別府市役所の職員自主目標に「温泉道名人を目指す」が掲げられたこともある。温泉道は地元市民の「温泉理解度」「温泉鑑識眼」を高め、新たな愉しみ方を普及させたことが一番の意義かも知れない。